

中国との交流

中国早期建築の研究

日本学術振興会の特定国派遣研究員（長期）として、1992年5月16日から8月29日まで、中国で表記の研究に従事した。おもな受け入れ機関は、中国社会科学院考古研究所である。研究の対象は、主として新石器時代から唐代にかけての建築と都城であり、北京のほか浙江・福建・陝西・四川・チベット・雲南・黒龍江・遼寧の各地で、数多くの遺跡・古建築・博物館を訪れることができた。とくに印象深かったのは、福建省武夷山市近郊の崇安城遺跡（漢代）である。崇安城は、『文物』その他の学術雑誌に発掘成果がいくどか報告されてきたが、遺物・遺構のあらゆる側面に中原系の要素と閩越土着の要素が見られるため、遺跡の担い手に関する議論が大きく分かれてきた。建築遺構に限定しても、宮殿建築の外観を中原系の台榭建築に見せながら、その内部には南方系の高床式建築技術を応用しており、このような建築を築造したのが、閩越人だったのか、南下した中原漢人だったのかは、いまだに断定しにくい状況にある。それにしても、どうやら私は、この遺跡を訪れたのはじめての外国人研究者であったようで、特殊な建築遺構をつぶさに観察できたのは、まことに幸運だったというほかない。現地で12年間も発掘に携わり、今回も私を案内していただいた張其海氏（福建省博物館）に、この場を借りて、感謝の気持ちを記しておきたい。

このほか、滞在期間中には、小野健吉・溝口正人・杉本和樹3氏の協力を得て、雲南省ナシ族の母系社会と建築技術に関する調査もおこなった（住宅総合研究財団の助成による）。この成果については、『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論集』を参照されたい。（浅川滋男）

交河故城保存修復のための調査

この調査は、ユネスコによる中国新疆ウイグル自治区交河故城保存修復プロジェクトの第一段階として実施したものである。ユネスコからの要請により、1992年8月に町田章が概況調査のため現地を訪れたのに続き、同年10～11月に村上隆・小野健吉・小沢毅・文化庁記念物課の桂雄三氏らが、新疆ウイグル自治区文化庁・新疆考古研究所と共同で、現地の基礎調査を実施し、その成果報告を和文・英文でユネスコに提出した。

遺跡概要 交河故城は、シルクロード天山南路沿いのトルファン市の近郊にある都城遺跡。2本の河川が合流する地点に位置する柳葉状の台地（比高30m、長さ1.7km、幅0.3km）上にある。B.C. 2世紀に車師前国が王城を置き、唐代には安西都護府が一時期置かれ、唐の西域経営の中心となった。その後も都市として存続したが、モンゴルの勢力により14世紀に滅亡した。現在残っている都市遺跡は、おもに唐代に建設された役所・住居・寺院・墓地などである。

調査成果 小沢は、遺跡内の建物の構築法が、地山削り出し、版築、生煉瓦の積み上げの3種類に大別され、それぞれの分布が建物の種類とともに明確な特徴を示す事を指摘した。また、小沢・小野は、本格調査に際し正確な測量に基づいた実測図の作成が不可欠である事を提言した。

村上は、壁体構成材の材質分析と現地での24時間の温湿度計測に基づき、凍結融解現象が壁体の劣化の一因となっている可能性を指摘し、今後合成樹脂などを用いた本格的な保存処理を実施するとすれば、現地でのテストを重ねる必要があることを指摘した。小野は、後世の要素を含まない純粋な遺跡景観の重要性を指摘し、その景観保護を提言した。また、遺構の人的毀損を防止するため、観光客の見学ルート設定の素案を提出した。(小野健吉)

華北古建築調査

1992年8月9日より23日まで、中国華北の古建築の調査および修理方針の検討会に参加するために訪中した。調査団は鈴木所長、国立歴史民俗博物館の濱島正士教授、京大人文研の田中淡助教授および藤田盟児の4名で、国家文物局、文物研究所、山西省文物局、河北省文物局、山西省古建築保存研究所などのお世話になり、特に羅哲文氏は終始同行して下さった。主な調査対象は、山西省では、大同市の上華嚴寺・下華嚴寺・雲崗石窟・善化寺、渾源県の懸空寺・永安寺、応県の仏宮寺釈迦塔(いわゆる応県木塔)、代県の鼓楼、太原市の文廟・永祚寺、祁県の県城などである。とくに、応県木塔はひどい歪みが生じ、破損の危険性が高まっているので、文物研究所の管理のもとに修理が計画されており、その方針を検討する学術会議が、日本側のほかに、修理を担当する文物研究所の張子平氏、山西省古建築保存研究所の柴澤俊所長、木塔保管所長、応県県長らが参加してもたれた。調査の後半では、薊県の独樂寺、天津市の清東陵などを訪れ、独樂寺では文物研究所の余鳴謙・孔祥珍両氏や、天津市文化局の張新生局長らと同様の修理方針に関する会議をもった。純木造建築の解体修理経験の少ない中国では、日本側の木構造への理解と修理経験が少なからず役立つものと思われた。また国家文物局の張徳勤局長による歓迎会が開かれるなど、中国側の期待が大きいことが伺えた。(藤田盟児)

日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究

1991年6月に奈良国立文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との間で調印した「友好共同議定書」による「日本古代都城と中国隋唐都城との考古学的比較研究」の2年目にあたる。共同研究は文部省科学研究補助金(国際共同研究、代表鈴木嘉吉)によるもので、8月には鈴木嘉吉・町田章・上原真人が赴き、代表的な中国の都城遺跡を調査した。次に10月4日から2ヶ月間、西口寿生・寺崎保広を考古研究所に派遣し、洛陽城の白居易宅跡の発掘調査に参加するとともに、各地の都城遺跡・遺物の調査を行った。特に今回は漏刻関係の遺跡と遺物、および漢簡などを実見することができた。一方、10月28日から2ヶ月間、中国社会科学院考古研究所の朱岩石・包強の2名が来日し、平城宮跡・藤原宮跡の発掘に参加するとともに、日本考古学の現状について研究した。1993年3月には、考古研究所から徐光冀副所長はじめ、段鵬琦・馮承澤・杜玉生の諸氏が来日し、奈良国立文化財研究所において「日中都城研究の現状Ⅱ」と題する公開の研究会を開催し、討論と交流を深めた。中国側の発表は徐「東魏北齊鄴城朱明門跡の調査と研究」、段「漢魏洛陽城跡出土の北朝磁器と施釉土器」、杜「北魏洛陽外廓城の発見と研究」、馮「隋唐洛陽城の九洲池跡の発掘調査」であった。(寺崎保広)